

## 『ながおくん』

時の頃は、4月の初旬でしょうか。窓の外には、季節を忘れた雪が、まだちらちらと舞っています。風も強く、びゅうびゅうとうなり声をあげて、白い雪粒を横に押し流しています。

南向きの小さな窓に面したソファに体を埋め、ながおくんは、本を読んでいます。見開きB5版のハードカバー。1週間前に読み始め、ほぼ毎日のように向き合っている本です。今日も朝7時に起きてすぐ、何も口にせずにこの本を手に取りました。

私の位置からは本のタイトルが見えません。でも、時折、ふんふんとうなずきながら、またある時には、嘆息をもらしながら読んでいる様子からするに、羅列的な専門書というよりも魅力的な登場人物があり、謎があり、スリルがあり、ダイナミックな展開がある、心おどる物語なのでしょう。そう推測しています。

折りにふれ、今日も感嘆のため息をもらしています。よほど気に入った作品のようです。ついさつき、スイッチを入れたコーヒーマーカーが、こぼこぼと蒸気音を立てています。

「スパゲッティ…」

不意に、そうもらしました。そういうお話なんでしょうか。それともお腹がすいたのでしょうか。確かに読み始めてもう3時間です。くるとキッチンの方にふり返り、何かを思案したかのように見えました。結局は本に目を戻しました。

「パスタ…」

ひと呼吸した後、今度はそうつぶやきました。やっぱり食べたんだ。お腹がすいたに違いありません。心なしか、ぐううう、という低い音を聞いた気がします。

スパゲッティ。パスタ。そう言えば、どう違うのでしょうか。私はどちらとも食べたことがないのでよく分かりません。外では、強風に引っ張られたラーメン屋さんののぼりが、ちぎれまいとがんばっています。

「バ、パキラ。」

どきっとしました。予期せず、自分の名前を呼ばれたからです。日常的に呼ばれることになかった自分の名前が、何の前ぶれもなく口に出されたからです。

しかし、その後の発見ほど、私の心根を寒からしめたものではありません。

ながおくんが私の方に体を向けました。その時に、本の角度が変わり、背表紙が目飛び込んできました。

『実践！何でも食べてみよう！植物編』。

背表紙にはポップな字体で、そう書かれています。

表紙には、種々多様な植物のイラストが散らしてありました。

—— 気軽に食べてみましょう！——

そういった作り手の意図が、見えすぎるぐらい見えるような装丁でした。

私は植物。人間の世界ではそう分類されています。ざわざわと、心に波風が立ち、水面が超高速で沸騰していくのを感じます。

まさか：もしかして：

人間と同じような速度で空間を移動することのできないわが宿命を呪います。

ながおくんが近付いてきます。

いつもより顔がほころんでいるような。波風の立った心には、見慣れたながおくんの顔も、得体の知れない異形の形相に見えてしまいます。悪意や後ろめたさとは一切無縁な、純粹な好奇の目で私を見定めているように思えてしまいます。

一步、また一步と。確実に近付いてきます。

時間にしたら、ほんの数秒の間の出来事だったでしょうか。私はその短い間に、いろいろなことを思い出しました。

ながおくんと初めて出会った時のこと、初めて水を浴びせてもらった時のこと、新芽が芽吹いた時のこと。6年前に大通りの園芸市でながおくんに見初められ、2度の引越しを共に経験しました。いつも日当たりの良い窓際に置いてくれ、強すぎる陽射しの時には、レースのカーテンを引いてくれました。生まれ育った故郷の熱帯を思い出させてくれるように、水浴びのときはいつもシャワーでした。節目ごとに写真も撮ってくれ、ブログで成長記録を公開してくれました。

そして、一瞬の間に、これから私の身に起こるであろう出来事を受け入れる気持ちを持つに至りました。人間の世界では、覚悟という言葉で表現されるのでしょうか。

私はバキラ。自分でつけた名前ではありませんが、けっこう気に入っています。今まで楽しかった。ながおくん、ありがとう。さようなら。

ながおくんは、私の前で立ち止まりました。従容として死に就く心持ちで、その後を待ちます。すると、ながおくんは、私の後ろにある大きな窓の外に目をやり、荒れ模様の天気を確認し、いそいそと去っていきました。

私は予期しない行動に我を忘れ、ぼんやりとながおくんの背中を追いかけました。

ながおくんはキッチンに行きました。ごそごそとスパゲッティを取り出し、テレビをつけて。たまねぎ、ベーコン、バジルを刻みながら、茹で上がるのを待っています。

私はバキラ。

これからこの部屋で生きていきます。

多くの充足感と少しの緊張感を持って。